

【参加者の声】

大萱生都さん

きむろとしてうじんじんの「野点」を知った時から、イメージが広がりました。実践は、予想をはるかに超えた取り組みで、町内の方々と積極的に交わって、語り合う、じんじんさんや東京の「谷中のおかって」のメンバーや東京藝術大学の学生のみなさんの魅力と行動力に、参加した方々が生き生きとした表情で、自分の出来る事を声に出し積極的に参加する姿を見る事ができて、私も嬉しくこれからの生活に灯りをともしてもらいました。町外の方の参加もあり、「ぜひ宮古に来てもらいたい」との声も聞かれ、大槌での「野点」の経験を伝える役割も出てきて「物づくりは人づくり」の輪が広がり、心に残る「野点」になりました。

手づくりケーキ シフォン

小林波子さん

『大槌の地元の食材や季節感にこだわったものをお店に出していきたい。』ひょうたん塾に参加したことで、この様な思いを実行に移していくアイデアや様々なアンテナが広がった気がします。今回のフォーラムでは新作シフォンを出し、その反応も楽しみに会場に足を運びました。いろんな人たちの集まる場所で、アイデアを話すことは新たなひらめきや大槌のブランドを実際に作ってみる際の大きな後押しになっています。これからも大槌の地元食材にこだわった「大槌ブランド」を楽しみながら自信を持って作ってみたいと思います。

小銭中村仮設団地 自治会 会長

赤崎幾哉さん

昨年6月4日(月)「名称と趣旨に誘惑」されて参加。震災前には「御社地会」として20年間運営、現在は「仮設団地自治会」を任されている。昭和53年3月、18年振りに帰郷後、町に「覇気」が感じられないことが「気」になり、「何とかしなければ」との思いで町内会「御社地会」を結成する。「御社地音頭と踊り」を「手づくり」で制作し、いろんな「場」で「披露」。

今回「稀有の天災」を経験することにより、誰もが今までの「生き方」を「変えざる」を得なくなったのではないだろうか。だからこそ今「ピンチ」を「チャンス」に捉え、新しい大槌町を「創造」する「大所高所」からの「視点」と「忘己利他」の「こころ」が大切。全国各地から「団体・個人」の方々が「よその町の為」、いろいろの「場」で復興への「行動」を起こしてくれている。全くありがたいことだ。町の中でも「復興」へ向けた「各種団体」が「組織化」されている。この「熱意」を町中に広める方法はないものか？大半の住民は、いつものように「他人事」として「変化を望まない」ようにわたしには見えるが如何なものか。
「昔のしがらみ」から「抜け出る」絶好の機会が来ている。その「場」に出て、「議論」し「行動」することを「塾」で教わった。企画に感謝・感謝。

【事務局日記】

「まじくる」事から見えてきたこと。 見ていきたいこと (記 元持)

まじくる場として、さまざまな人々が同じ空間に居合わせたり、WEB上での接点を持つことができたフォーラムは、多少騒がしい印象を受けた人たちもいるでしょう。これを、人々が集まり、そこに情報や様々なアイデアが持ち込んでくる活気ある場として見る事もできます。スピーカーの皆さんをはじめ、会場に居合わせた参加者は、人前で話す、対話をする、自分の考えや気持ちを表現し他の人に発信していました。感情や意思、こだわりや経験に基づくものなど、自分を表現する機会は、他者がいる事、即ち人が集まる場所では必然と生じてくることです。さらに、表現の手段は様々で、話し言葉、文字、絵や写真、音楽、祭りの舞などもその一つで、文化や芸術の持つ表現は、さらにそれを豊かにしていると感じます。フォーラム会場は、自己表現の様々な形と参加者同士の自己表現が、化学反応的なひらめきアイデア(新たな価値観)や情報が行きかう「まじくる」機会となりました。そこにこれからのまちづくりにおける人材育成としてのひょうたん塾に可能性を見ていくな、表現の自由と柔軟さ×楽しみ(わくわく感)を形にしていくな、動きを、町づくりへつなげてくことが期待されているのではないのでしょうか。ひょうたんひょうたん島の歌詞「♪苦しいこともあるだろうさ(中略) だけど僕はくじけない、泣くのは嫌だ、笑っちゃおすすめ!」にも、表現されています。



最後に、今年度ひょうたんひょうたん塾に関心をもち、企画や参加していただいたみな様に感謝申し上げます。ありがとうございました。魅力ある町をこれからも一緒に盛り上げていきましょう。

ひょうたん塾通信

2013年3月号

【発行年月日】平成25年3月20日
【編集・発行】ひょうたんひょうたん塾事務局

事務局

主催：ひょうたんひょうたん塾、大槌町、東京都、東京文化発信プロジェクト室(公益財団法人東京都歴史文化財団)、特定非営利活動法人いわて連携復興センター
※本事業は Art Support Tohoku-Tokyo (東京都による芸術文化を活用した被災地支援事業) です。

©井上ひさし/山元護久/ひとみ座/NEP21 キャラクターデザイン：片岡昌

第9号

目次

- 【レポート】2012年度まとめフォーラム 後編
- 【参加者の声】大萱生都さん 小林波子さん 赤崎幾哉さん
- 【事務局日記】「まじくる」事から見えてきたこと。 見ていきたいこと (記 元持)

ひょうたんひょうたん塾は岩手県大槌町において、町民主体による住み良いまちづくりを進めるため、文化芸術を活用したソフト面の復興を考え、実践していくための人材育成事業です。



【ひょうたんひょうたん塾事務局】

Eメール：hyotanjuku@gmail.com

住所：〒028-1131 岩手県上閉伊郡大槌町大槌 24-24-2

電話：090-6229-4621

【ひょうたんひょうたん塾 ホームページ】

http://hyotanjuku.jimdo.com/

詳しいレポートやスケジュールなど、随時更新中!!

2013年2月2日(土)

ひよっこりひよたん塾 2012年度まとめフォーラム

「大槌町で《まじくる》こと

「お互いのいまを知り、これからの大槌のまちを考える」

後編

第2部は、ゲストである山口洋典さんによる話題提供からスタートしました。テーマは「阪神淡路大震災から始まった震災と文化の現場」です。阪神淡路大震災を体験した山口さんは現在、立命館災害復興支援室チーフディレクターを務められており、自身の経験を生かしながら被災地各地で活動されています。

「Volunteer is Jazz」

前半の地元団体によるセッションを聴いた山口さんは、「Volunteer is Jazz」(ボランティアの知/渥美公秀より引用)という言葉を紹介しました。ジャズは、その場その場のお客さんや会場、空気などによって演奏を変えています。災害救援も、その場その場の物語があつてこそ成り立ち、良い意味で場当たりのなもの、即興であると考えておられます。ひとりひとりが物語の登場人物のひとりであり、主役はその場ごとに変わっていきます。まさにそれが即興演奏です。シナリオは大きく存在しますが、

話が変わるかもしれません。そうした日々の暮らしをよりよい方向にもっていくための、阪神大震災以降多くの人が現場を往復しながら導きだした知恵ではないかと山口さんは語りました。

物語をつくること

続いて、山口さんと藤浩志さんの対談です。藤さんも、ジャズの話に共感されたようです。藤さん自身、鹿児島で水害にあつたり、福岡で地震にもあいました。常に起こらないと思つてた事が起こる。何かがあつたときに、そこにあるもので何かをしないといけない。そういうときには、その場にある状況の中で、何かできるものが自然に立ち上がってくるもので、そこにはいろんな物語が込められていると藤さんは話しました。第1部の吉里吉里国芳賀さんの森の話も感動的でしたが、未来に向かっていく濃縮された時間を作りだすために、強い意志を持った多くの人たちがいます。そういう中から結

果としていろんな活動が出てきました。まず動いたことが、そのままいろんな物語を発生させています。希望を作っていくためには、できることをちゃんとやるということが重要だと藤さんは語りました。

場と時間の関係

第1部の中でも「場」が大事なという話があがりました。あるアメリカの建築家が「空間×時間↓場」という関係性を唱えています。同じ空間でも、どういう時間を生み出すかによって、それぞれの場を生み出します。どういった時間が流れるか、にも注目すべきと山口さんが話しました。藤さんは普段美術作品を作る中で、作品(モノ)を見られることが多いようですが、モノを作る時間がすく豊かな時間であると話します。何かを作り始めた瞬間からできるまでの時間は、ワクワク、ドキドキしてすくおもしろい時間です。まちづくりでも、いろんな人をつくることで、思いもよらない方向にいくこと



ハードとソフトの結び目

会場から町民は自分のことや町のことに不安を持っているという声があがりました。目に見える復興が進んでいないため不安を感じ、今回のようなソフトの話は入りにくい。しかし、ハードとソフトを同時進行していかないといけないという思いも聞きました。それに対して山口さんは、ハードとソフトの結び目が大事であると話しました。精神的なところで何かする際、目に見える部分も大事なので、そのあたりの折り合いをどうつけていくかがこれらの課題です。今回のような第三の視点でみられる機会は大事だと山口さんは考えます。実際にまちをつくるときには、多くの違和感があります。そのため、いろんな活動に触れていくのが難しいのだと藤さんも感じています。みんながそれぞれ違うことをしているのに、「みんなで」「絆」のようにくられてしまっている現状もあります。多数派の意見にまとめられ、本来言いたかったことが伝えられていないことに苦しさを感じている人もいるのではないかと、山口さんは話しました。

いつ復興は終わるのか

「復興」から「日常」への区切りをどこでつける必要がある、と山口さんは考えます。そのタイミングは長く、焦らないほうが良いそうですが、どこかで判断する必要があります。

区切りをつけて、後悔したことがあつたら日常の活動として継続していくと良いと山口さんは話しました。更新をしていくことが大事になってきますが、藤さん自身、常に更新していくことが当たり前になっていて、変化していく様を意識するのが感覚的に難しいそうです。次に起こることに對して備えないといけない。更新に終わりはないと藤さんは話しました。町民の役場職員の方も、区切りがテーマになることに共感されたようです。ソフト面が重要であることは理解し、人と人の繋がりを考え直すよう進めておられます。なかなか形が見えてくず、町民に不安や焦りを与えていると認識されており、できるだけ早くみんなが不安な気持ち話し合うような取組みをサポートしていきたいと奮闘されています。

「形」と「型」

会場から、これまでの震災の経験が東日本大震災のどんな影響を与えているか、という質問があがりました。阪神淡路大震災では、「型」があまりなく、ほぼ「即興」で進められました。即興を続けていくと、「型」ができてあがります。今回の震災では、その「型」にそつて物事が進められましたが、逆にまだまだいろんな「形」があるということに目がいきにくくなったと山口さんは話しました。その物語に合った「形」があるということも考えていかなければいけません。



「文化とは人々の生活を束ねたものである」

会場からも、素晴らしいコメントをいただきました。「忘れてはいけないのは、芸術や文化という、人々の「生き様」です。行政が一生懸命やるだけでなく、住民ひとりひとりができることを一生懸命に行い、その中でいろんな人と交わり、意見を交わし合うのが大事です。「町民憲章」には、一番に自然のことがあります。そして四番目に文化が入っている。井上ひさし氏の言葉に「文化とは人々の生活を束ねたものである」とあります。こういうふうに人が集つていろんな事を紡ぎ出す事によって新しい文化が生まれしていくはずですよ。また、外からの刺激があつてこそ動くことも多いので、それをウェルカムする環境を作っていくことが大事だとの意見もありました。

「結び目」になること

山口さんは最後に4つの言葉をお話しました。「ムードづくり」「スタッフワーク」「ビジョンの共有」「メンバーシップ」です。「ムードづくり」は、一生懸命やっている態度を見せると、状況が変わってくるということです。「ビジョンの共有」は、状況をどう共有するか。共有することからいろんなことが始まります。「スタッフワーク」「メンバーシップ」は、関わる人の質について。中でも「興味関心を注ぐ人」は非常に重要だと藤さんは語ります。どんな小さな活動でも、それを注目している人がいると動き出します。興味関心をどう集めるか、が大事だと考えられます。

そして、4つの言葉の頭文字をとると「結び目」になります。町に関わるみなさんが、いろんな結び目になつていく良い。みんながどう地域を耕していくか。時間も経つて、耕す土台がみえてきた頃ではないでしょうか。そこにいろんな出来事や思い出、記憶を結んでいただければと、最後に山口さんは話しました。今年度の活動はこれにて終了です。来年度も、ひよっこりひよたん塾が良き「結び目」となれるよう、みなさんと一緒に作り上げていければと思います。